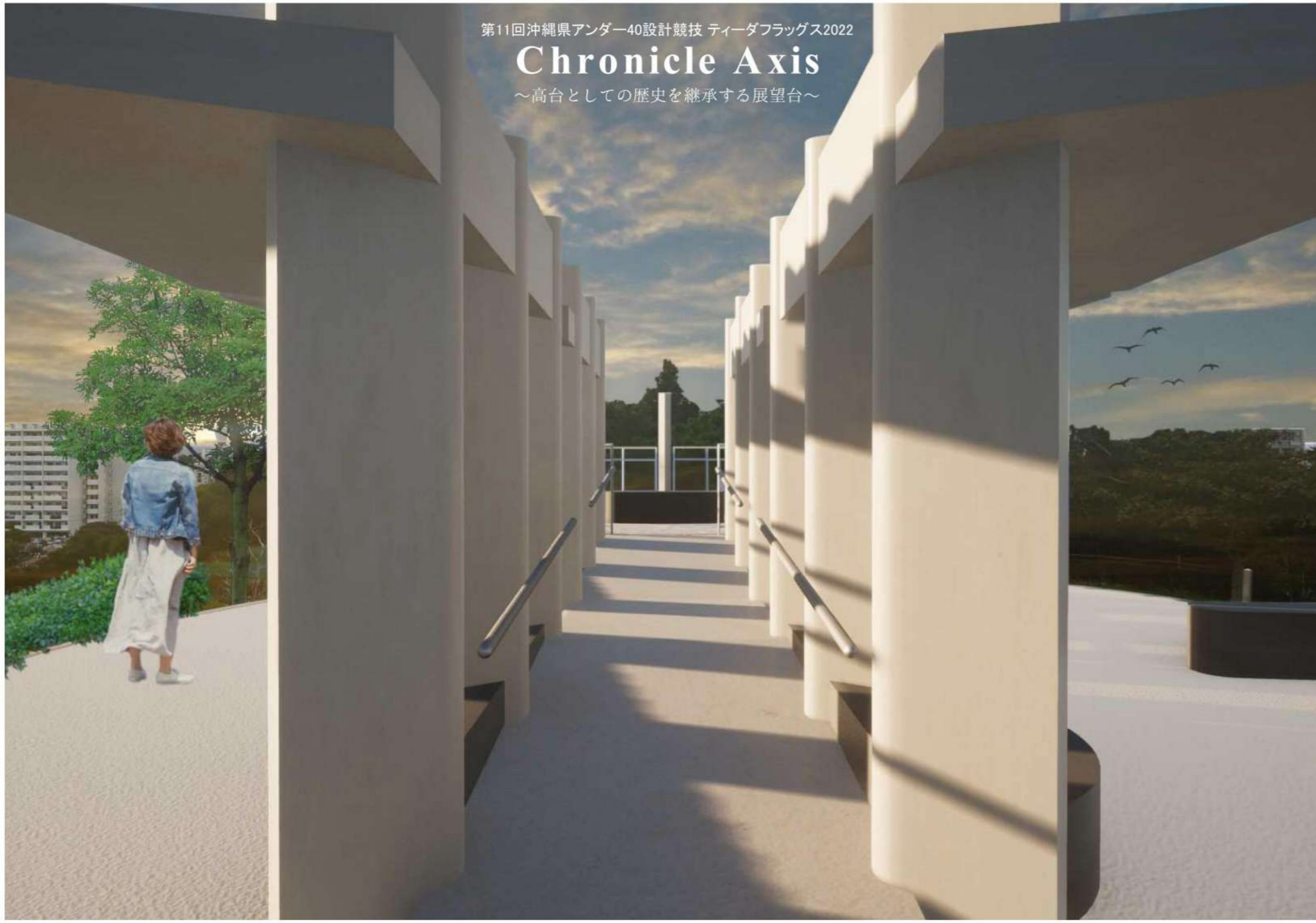


Chronicle Axis

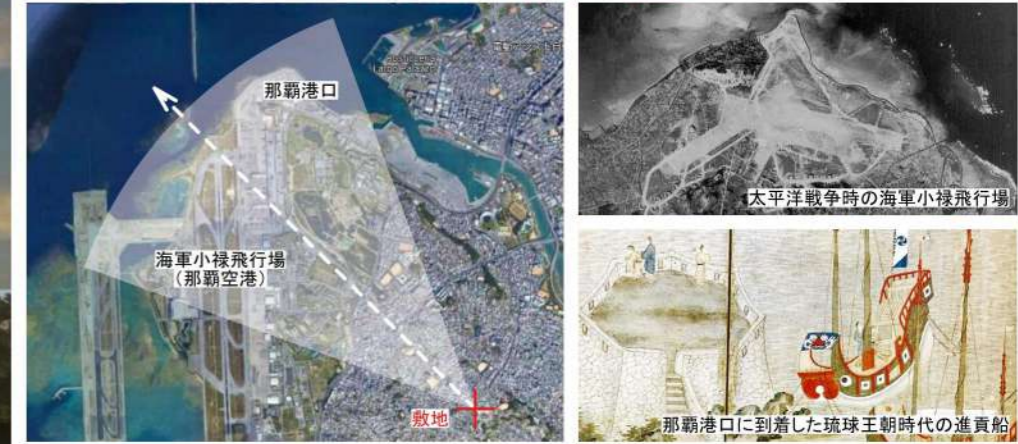
～高台としての歴史を継承する展望台～



01. プロローグ ～高台としての歴史～

本計画の敷地は、那覇市南西の豊見城丘陵に整備された海軍壕公園の戦跡ゾーンに位置しており、公園内で標高が最も高い場所です。戦跡ゾーンに残されている旧海軍司令部壕は、太平洋戦争末期、米軍の沖縄上陸を予想した海軍部隊によって設営されました。設営の目的は、海軍小禄飛行場（現在の那覇空港付近）の防衛であり、飛行場を見下ろすことができる高台が選ばれたことが記録されています。

また、琉球王朝時代に遡ると、中国や薩摩からの船が那覇港に入港することを高台から知らせる火番森（ヒーバンムイ）があり、船で輸送されてきた貨物や乗員の上陸監視を目的として、薩摩藩の島津氏により設けられたものとされています。この地の大きな特徴である"高台"という視点で歴史を振り返ってみると、那覇空港や那覇港口が存在する北西方向に視線が向けられた過去が浮かび上がってきます。



02. コンセプト ～忘れ去られた"高台としての歴史"の継承～

敷地の周囲には、「海軍戦没者慰霊之塔」を始めとした戦跡施設が存在していますが、対外的な影響を受けざるを得なかった沖縄・琉球の姿を示す"高台としての歴史"は、現代の人々に意識されずに埋もれてしまっているのではないのでしょうか。本計画では、かつての人々が目的をもって眺めたであろう方角を建築によって示すことで、人々に忘れ去られつつある"高台としての歴史"を未来へと受け継いでいく展望台とすることを考えました。

03. ダイアグラム

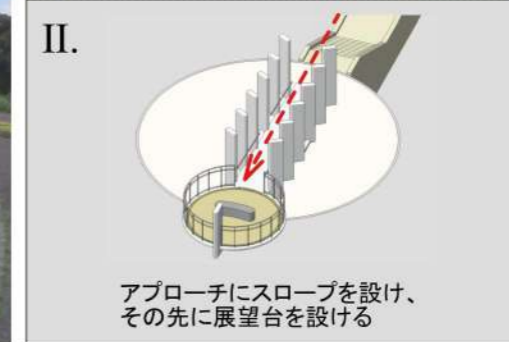
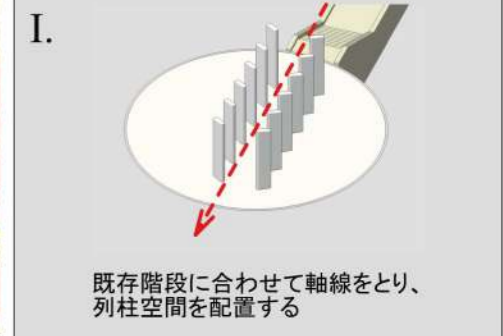
北西方向の視線を示す軸線については、慰霊の広場から敷地へと繋がる既存階段に合わせて設定することで、より方向性が強調されることを意図しました。建築構成については、アプローチを列柱空間によって構成することで、特定の方向に視線が向かうように計画し、その先に展望台を設けました。緩やかなスロープを上りながら、列柱空間を抜けて展望台に到達させることで、建築が示す方角の意義の高さを意識させる構成としました。列柱空間の南北側には屋根を架けて休憩所を設け、南北に拓けた眺望を楽しむ場や植栽に囲まれた落ち着いた場など、多様な人々を受け入れる包容力のある休憩所となるように計画しました。



正面から展望台を見る



既存スロープ下から全体をみる





展望台から那覇港口を臨む



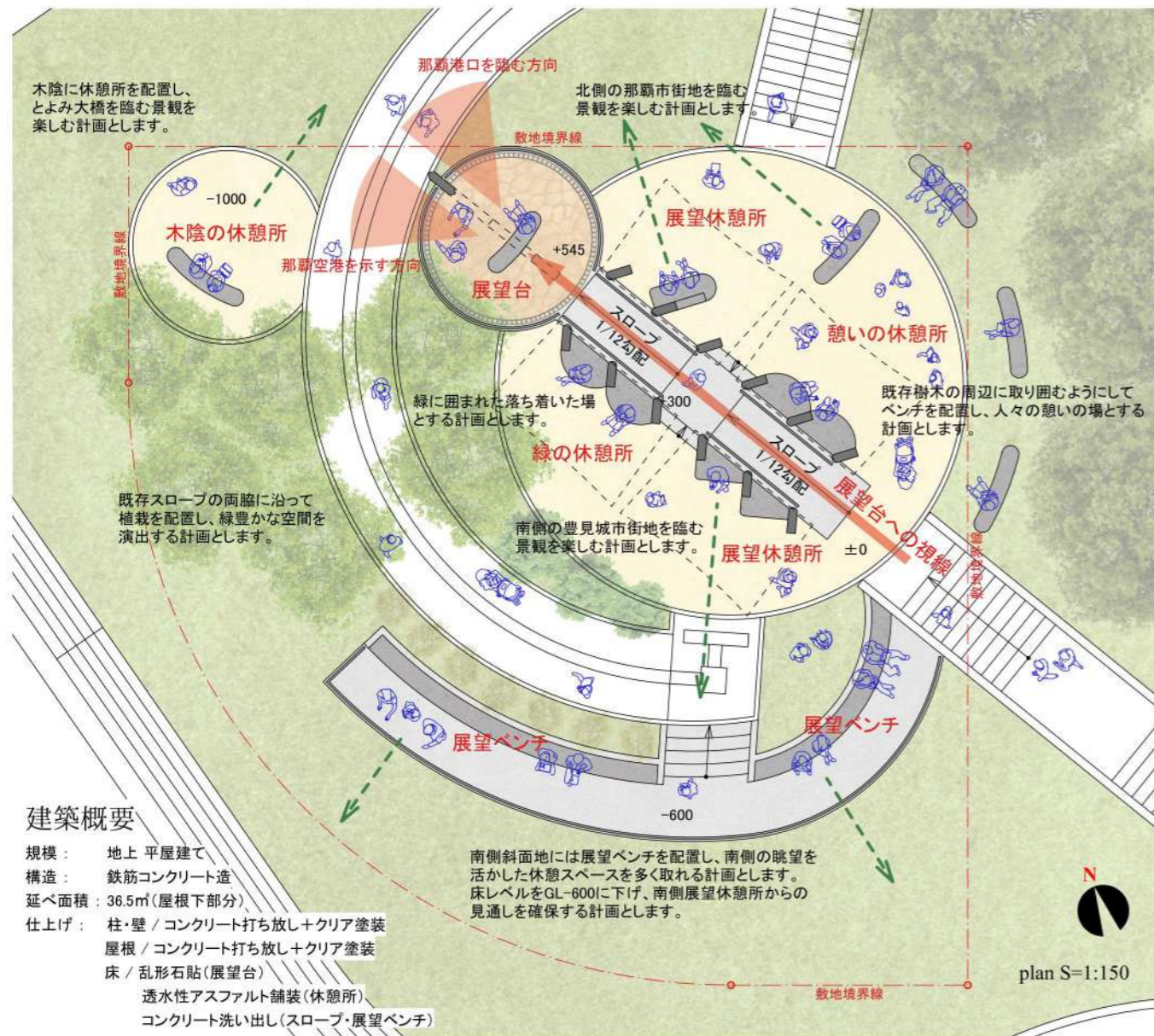
展望休憩所(南側)と緑の休憩所



展望休憩所(北側)と憩いの休憩所

04. 平面計画

展望台へと導く列柱は、軸線に対して角度を振った配置とすることで、展望台へスロープを上がっていく際には軸線方向の視線がより集まるようにし、展望台からスロープを下りてくる際は、周りに配置された各休憩所へと視線が移っていくことを意図しました。また、列柱と休憩所ベンチが一体となる意匠とし、展望休憩所から臨む景色の方向に応答するような角度配置としました。



展望ベンチを見る

05. 構造計画

施工コストに配慮して、一般的な鉄筋コンクリート造を採用し、耐久性向上を目的として、フライアッシュコンクリートを使用します。列柱間に梁を架け渡して片持ち屋根スラブを支える構造計画とし、壁面要素を削ぎ落とすことで、風圧力の影響が小さくなるように計画しました。また、建築の接地部分を既存GL±0のレベルにコンパクトに収めることで、傾斜地や広範囲の土工事を避け、コスト削減に配慮しました。

